

2026年8月23日

説教題『無から有を生む神』創世記 15：1～6 ～創世記④～

主任牧師 加藤 誠

「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」(創世記15章5～6節)

皆さんは空を見上げることがあるでしょうか。わたしは机に向かう合間に窓から空を見上げることがあるのですが、その時間を少し取るだけで心が鎮められます。「もし窓がなく壁だけで、空が見えなかったとしたら…」窓があり、そこから空が見えるということはなんと大きな恵みでしょうか。ボンヘッファーはナチスによって獄に捕らわれの身となった時、「狭い独房から見える一片の空が、今日のわたしの礼拝堂だ」と手紙に書いています。どれほど状況が閉じていても、空は開かれています。ふと空を見上げる時、私たちの中で何かが変わるのです。わたしの心の窓が開かれて、神とつながられる。それは私たちにとって大きな大きな恵みです。

先日、電車の中吊り広告にチャップリンの言葉を見つけました。「下を向いて歩いていたら、虹を見つけることはできない」。聖書では虹は神の約束。私たち人間がどんなにひどく墮落して絶望的な状況に突き進むとしても、神は人間を打ち滅ぼすのではなく、なんとかして救いに導く。「その祈りをわたしは止めない」という神の約束の虹。心の窓を天に向けて開き、神の語りかけを今日聴いて歩む者でありたいのです。

イザヤ書は語ります。「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起こる」(43：19 口語訳)。この「新しい事」とは、これまで起こり、経験したことをはるかに超える救いの出来事。私たちが思いもしない救いを神は用意されている方。聖書は私たちが顔を天に向けて、神の約束の虹を見つめながらこの世界を歩む信仰に招いています。

創世記のアブラハム(15章の時点ではアブラム)は、「あなたの人生にわたしは新しい出来事、救いを起こす!」という神の約束を握りしめて生きた人です。「わたしはあなたを祝福し、あなたを大いなる国民の父とする」。アブラハムは75歳の時にこの神の語りかけを受け取り、カルディアを旅立ちました。それから3年、5年、10年。創世記15章はアブラハムが85歳頃の出来事ですが、約束から10年も経ちながら、その約束の実現の兆候はまだ何も見えませんでした。そのためにアブラハムは現実的な対応を考えます。「自分たちには子どもがいないので、家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです」(つまり養子)と。しかし、神はそのアブラハムを外に連れ出し、夜空一面に広がる星を見せて言うのです。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる。」すると「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」のでした。

後に、使徒パウロはこのアブラハムの信仰を「無から有を生む神を信じる信仰」と語っています。「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を生み出す神を信じたのである。…すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだが生きた状態であ

り、サラの胎が不妊であることを認めながらも…神はその約束されたことを、また成就することができる と確信した」 （口語訳 4・17、19、21）のだと。

無から有を生む。ゼロから 1 を生む。全く何もないところに、あるものを創り出していく。ビジネスの世界では「これまでにない新しい価値を生み出す」ことを「イノベーション」と言います。それは「一を一〇にする拡大や改善」とは異なる、とても難しいことです。「それまであるもの」とはまったく異なる、新しい製品やサービスの創造のことであり、新しい視点、新しい発想が求められます。

パウロは「無から有を生むこと」を「死者に命を与えること」と重ねて語りました。アブラハムは自分も妻も年齢的には死んだ状態。子を産むことに関しては医学的に不可能なこと。しかしその死んだ状態のものを「起こして、生かし、命を吹き込む」「土のチリで人を造り、命の息を吹き込む方」としてアブラハムは神を信じたのでした。

もっともアブラハムが「およそ百歳になっていた」というのは、創世記 18 章の時点のことであり、今日私たちが開いている 15 章の出来事とは違うのですが、パウロは本質的には同じ出来事と考えたのでしょう。アブラハムにとって信仰とは単に「神がいると信じること」ではなく、人間の目には「無」（絶望や不可能）にしか見えない状態の中に、「有」（命や希望）を生み出される神の力を信頼して生きることでした。

しかし、この信仰を、アブラハムは前から持ち合わせていたわけではありません。彼は自分の現実の限界を知っていて養子という現実的対応を考えていました。けれども、そのアブラハムを、主なる神はテントの外に連れ出し、夜空一面に広がる星を見せながら、ご自身の創造の圧倒的な力を信頼する「信仰」に導かれたのでした。

星空というと、その昔、神戸教会の夏期学校で兵庫県天文台のある山に出かけた時の夜空を思い出します。都会にいと見えない小さな星が、真っ暗な夜空一面にバケツをひっくり返したように広がり、そのあまりの美しさにただただ圧倒されました。圧倒的な神の創造の御業の前に自分たち人間の小ささを思い知らされた時でした。アブラハムもこの神の創造の御業の圧倒的な力の前にひれ伏させられ、「神さまがなされる不思議をただ受けていこう」という思いにさせられたのではないかと想像します。アブラハム自身は先ほども紹介したように現実的に考える人であり、百歳を前にして「お前と妻サラの間に子が生まれる」と言われたときには二人とも「そんなことがあるだろうか」と笑ってしまった、ふつうの人でした。彼ら自身は神を信じ切れない不信仰を抱えた人間だったのです。しかし、そのような不信仰なアブラハムになおも関わり続ける神の真実と熱意を知らされたときに、アブラハムは「この神を信じてみよう」と導かれたのです。アブラハムの信仰は、自分自身の力で得た信仰ではなく、神の側から不信仰なアブラハムに届けられた信仰でした。

このアブラハムと同じように、私たちもまた小さなテントから外に出て神の御業を見上げ、神が起こされる「新しい事」を信頼して歩むように招かれています。大井教会の教育館建築もそうです。私たちの願いではなく、神が願われること、神がよしとされる出来事が、私たちの思いを越えて実現するのです。このとき私たちも、天を見上げて、無から有を生み出される神への信仰をいただいでいきましょう。